
プロジェクト	ASAF 対応
項目	のれん及び減損

本資料の目的

- 2017 年 7 月に開催される会計基準アドバイザー・フォーラム (ASAF) 会議では、国際会計基準審議会 (IASB) ののれん及び減損に関するリサーチ・プロジェクトに関連して、3 つの事項が議論される予定である。
 - 「too little, too late」の問題への対処として考えられるアプローチ (ASBJ が提出したアジェンダ・ペーパー)
 - のれんを巡る財務情報に関するアナリストの見解 (ASBJ が公表したリサーチ・ペーパー)
 - 世界作成者フォーラム (GPF) 会議のフィードバック
- 本資料は、前項(3)の GPF 会議のフィードバックに関する事項の内容をご紹介しますとともに、ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案について、ご意見をいただくことを目的としている。

ASAF 会議の目的

- IASB は、のれん及び減損に関するリサーチ・プロジェクトの中で、減損テストの簡素化及び適用の改善のためのアプローチを検討している。2017 年 7 月開催の ASAF 会議では、この点に関して過去の GPF、資本市場諮問委員会 (CMAC)、ASAF 会議の中でメンバーから得られたフィードバックを紹介し (別紙 1 参照)、IASB スタッフが検討中ののれんの減損テストを簡素化し改善するアプローチに対する ASAF メンバーの見解を得ることとされている。

議論の背景及び方向性

- IASB スタッフは、のれんの減損テストを簡素化し改善する目的において、次のアプローチを検討しており、2017 年 7 月開催の ASAF 会議では、このうち(1)及び(2)について、IASB スタッフが現在検討しているアプローチ案が紹介されている。
 - 単一モデルによる回収可能価額の算定
 - 年次の減損テストの廃止

- (3) 使用価値 (VIU) の計算に関する改善
- (4) のれんの CGU への配分に関する追加的な規準又はガイダンスの提供

(単一モデルによる回収可能価額の算定)

- 5. 処分コスト控除後の公正価値 (FVLCD) 又は VIU のいずれか高い金額としてではなく、単一モデルで回収可能価額を算定する方法として、IASB スタッフは、次の3つを検討している。
 - (1) FVLCD のみを基礎とする方法
 - (2) VIU のみを基礎とする方法
 - (3) 企業が資産の回収を見込んでいる方法に応じて FVLCD 又は VIU のいずれかを基礎とする方法
- 6. IASB スタッフは、単一モデルによる回収可能価額の算定を巡る議論として、次の3つを紹介している。
 - (1) 単一モデルの使用は、減損テストの有効性を改善する可能性があり、減損テストをより適用と理解が容易で、現在のモデルに対する減損が覆い隠され減損の認識が遅れやすいという懸念を緩和する可能性がある。
 - (2) CFA 協会は、VIU は企業固有の性質を持つものであり、経営者に減損テストを通過する余地を与えるとの懸念と、公正価値に基づく減損モデルがより客観性があるとのフィードバックを寄せている。
 - (3) 少数の作成者からのフィードバックとして、VIU は企業が事業において継続して使用するために資産を保有しているという事実をより表しており、VIU は単なるベスト・シナリオではなく、幅広い経済状況を反映したものであるとのフィードバックを寄せている。
- 7. IASB スタッフは、次の点から、VIU と FVLCD が互いに近似するのではないかと考えている。
 - (1) 公正価値は通常レベル3のインプットを用いた割引キャッシュ・フロー法に基づくものである。
 - (2) レベル3のインプットは、経営者による最善の見積りと大きく異ならない可能性がある。
 - (3) VIU の算定のためのキャッシュ・フローの予測は、合理的で裏付け可能な仮定

に基づくものであり、外部証拠を重視している。

(4) 公正価値の測定と VIU の算定のために使用される割引率は、通常同じである。

(年次の減損テストの廃止)

8. 年次の減損テストを廃止し、兆候があるときにのみ減損テストを要求するアプローチを採用する場合の代替案として、IASB スタッフは、次の 4 つを検討している。
 - (1) 年次の減損テストの完全免除：減損の可能性を示す兆候がある場合にのみ、のれんの減損テストを要求する。
 - (2) 年次の減損テストの部分免除（制約がより少ない）：取得後の最初の 1 年は定量的な減損テストを強制し、その後は兆候に基づく減損テストを行う。
 - (3) 年次の減損テストの部分免除（制約がより多い）：取得後の最初の数年（おそらく 3～5 年）は定量的な減損テストを強制し、その後は兆候に基づく減損テストを行う。
 - (4) 年次の減損テストの部分免除（制約がより多い）：例えば 3 年ごとに定量的な減損テストを強制し、それ以外の期間は兆候に基づく減損テストを行う。
9. IASB スタッフは、のれんの減損の兆候として、「購入のれんを裏付ける主要な業績仮定又は業績目標と実際の業績が異なる」ことを追加し得ると考えている。
10. IASB スタッフは、兆候のみに基づくアプローチを導入する場合の帰結を、次のように分析している。
 - (1) のれんの減損テストのコストと複雑性が減少する。
 - (2) 現在毎年開示されている定量的テストに対するインプットの情報が、減損損失を認識した場合にのみ開示される。
 - (3) 減損損失の適時の認識に関する懸念が生じる。
 - (4) 指標のみに基づくアプローチが成功するか否かは、基準書の適切な適用、監査、及び規制枠組みに依存する。

ASAF メンバーへの質問事項

11. 2017 年 7 月開催の ASAF 会議における ASAF メンバーへの質問事項は、次のとおりである。

- (1) IASB が GPF メンバー及び CMAC メンバーから得たフィードバックは、ASAF メンバーの法域における作成者及び利用者の見解と概ね整合しているか。
- (2) 回収可能価額の算定を単一のモデル（すなわち、FVLCD 又は VIU）を用いて行うことで、減損テストの有効性が改善されると考えるか。
- (3) 公正価値の測定と VIU の測定は、多くの状況において大きく異なる価値を生み出す結果となると考えるか。その理由は何か。
- (4) IASB は、年次の減損テストを廃止し、兆候があるときにのみ減損テストを要求するアプローチの代替案のいずれかを検討すべきか。その理由は何か。
- (5) IAS 第 36 号「資産の減損」に挙げられている減損の兆候に追加すべき兆候（特に、過払いを示す兆候）として提案するものはあるか。
- (6) IAS 第 36 号では、内部報告から得られる減損の兆候として、財務関連の兆候が挙げられているが（IAS 第 36 号第 14 項）、非財務の兆候もあり得ると考えるか。

ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案

12. ASAF 会議における ASBJ 事務局の発言案は、次のとおりである。なお、我が国における作成者及び利用者の見解（質問(1)）は、ASBJ が提出したアジェンダ・ペーパー及びリサーチ・ペーパーの議論を通じて主張する。

減損テストの簡素化のための検討の進め方について

- (1) 「厳格で運用可能な」減損テストの導入は、のれんの償却を廃止する際の前提であったものであり¹、簡素化の目的の下で、減損テストの堅牢さが失われることがないようにすべきである。

単一モデルによる回収可能価額の算定（質問(2)及び質問(3)）について

- (2) 回収可能価額を算定するためのモデルの変更は、IAS 第 36 号における、のれん以外の資産を含む、資産の減損の概念及び目的を修正することに繋がるもので

¹ IAS 第 36 号 BC131G 項は、のれんの償却を廃止する結論の根拠の中で「厳格で運用可能な減損テストを考案できれば、のれんを償却せず、その代わりに毎期減損テストを行い、のれんの減損の可能性を示す事象又は状況の変化があった場合にはそれより高い頻度で減損テストを行うというアプローチによって、企業の財務諸表利用者にもっと有用な情報が提供される」と述べている。

あるため、これをのれんの減損テストに限定して議論することを支持しない。

- (3) 単一のモデルを用いた回収可能価額の算定は、のれんの減損テストの簡素化の目的において議論されるものと理解しており、質問(2)で言及されているような、のれんの減損テストの有効性の改善に繋がるものとは考えない。
- (4) VIU と FVLCD が結果として互いに近似するか否かという質問（質問(3)）については、場合によっては近似する結果が得られる可能性は否定しないが、近似し得ることが、VIU と FVLCD のいずれかのみを測定すればよいと結論付ける十分な理由となるとは考えない。また、仮に、VIU と FVLCD の計算結果が類似する可能性が高いと考えられる場合には、IAS 第 36 号が「いずれか高い方」に基づくモデルを採用する目的、あるいは VIU 又は FVLCD の測定の目的が十分に達成されておらず、IAS 第 36 号又は IFRS 第 13 号「公正価値測定」の測定に関する要求事項の見直し又は明確化が必要であることが示唆されている可能性も考えられる。

年次の減損テストの廃止（質問(4)）について

- (5) 年次の減損テストを廃止し、兆候があるときにのみ減損テストを要求するアプローチは、主観的な兆候判定のプロセスにより減損損失の認識を回避する余地を与えるものであり、減損テストの堅牢さを損なわせる懸念がある。一方で、減損テストの堅牢さを維持するために、より厳格な兆候を導入する場合、コスト削減の効果は限定的となると考えられる。

ディスカッション・ポイント

のれん及び減損に関する論点の内容及び ASBJ 事務局の発言案について、ご質問やご意見があればいただきたい。

以 上

(別紙1)

過去の GPF、CMAC、及び ASAF 会議から得られたフィードバックの紹介

- 2015 年 11 月の CMAC 会議
 - のれんの減損損失は、キャッシュ・フローの算定の目的では通常足し戻されるが、このことは、アナリストが減損損失を無視している又は情報として有用でないと考えていることを意味するものではない。
 - のれんの償却に関する見解は分かれていた。
 - 現在の減損テストは、有用な情報を提供している。
 - 他のアプローチを導入するよりも、減損テストをより堅牢なものとするべき。
 - 追加的な開示は、購入対価を正当化する重要な要素を投資家が理解するために役立つ。
 - のれんの帳簿価額の過去の企業結合ごとの内訳情報が必要である。
- 2016 年 3 月の GPF 会議
 - 主要な業績仮定又は業績目標の開示は、企業の競争上の優位性を損なわせる可能性がある。また、購入対価を裏付ける主要な仮定の中には、人的資産など測定や監査が難しい要素が含まれ得る。
 - 業績目標と実績との比較について、購入した事業が既存事業と統合される場合には、購入した事業についての業績の実績を追跡することが難しい。
 - 業績目標を達成しなかったことは、必ずしも企業結合が成功していないことを意味するものではない。
- 2017 年 3 月の GPF 会議
 - 複数の GPF メンバーは、年次の減損テスト免除と、使用価値の算定に含まれるキャッシュ・フローの制限の緩和に関する提案を好感していた。
 - 回収可能価額を単一モデルにより算定する方法について、複数の GPF メンバーが VIU を使用するモデルに対する支持を示した。
- 2015 年 12 月の ASAF 会議
 - のれんの事後の会計処理（減損のみアプローチ、又は償却及び減損アプローチ）に対する見解は分かれていた。

- 情報を得ることによる利用者の便益と、要求事項を適用するための作成者のコストの比較分析が必要である。
- 減損テストは、のれんの事後の会計処理のアプローチに関わらず適用されるものであるため、減損テストの改善にまず焦点を当てるべきである。
- 減損のみアプローチを維持する場合には、堅牢な減損テストを維持する必要がある。

以 上